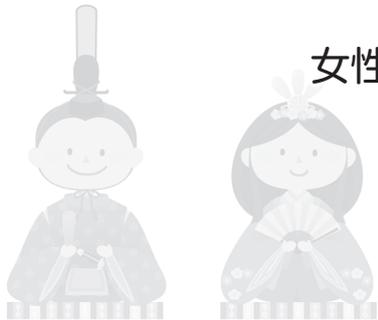




## 女性医師支援センター便り



### 女性医師の働く環境改善を求めて

宮城県女性医師支援センター委員

宮城県女医会監事

山本 蒔子

#### 仙塩地区女性医師支援セミナー 坂総合病院意見交換会

今年の活動は、1月13日の坂総合病院訪問から始まった。櫻井芳明宮城県女性医師支援センター長、高橋克子副センター長、佐々木悦子宮城県医師会常任理事及び山本蒔子委員が参加した。はじめに高橋副センター長が、日本医師会及び宮城県の女性医師支援センター事業を紹介した。続いて病院の桜井事務局長から現状を発表していただき、その後、職員との意見交換を行った。

坂総合病院では、女性医師数は医師72名中18名と25%を占めており高率であった。管理職では、院長と副院長は0だが、部長は6名中1名、科長は20名中4名であった。女性医師が働き続け易い環境であり、また昇進も考慮されていると感じた。

保育環境では、院内保育所は以前から設置されているが、定員が16名で対象が1歳までであり、小規模なことに驚かされた。ただし、優れている点は「夜間保育」で、申し込みの必要があるが、仕事が延長する時に午後9時まで保育してもらえることであり、院内保育所の非利用者も利用できるということであった。病児保育に関しては、看護師からの要望はあるものの実施されていなかった。東北大学病院において教室委員会が主導で病児保育を始めた経緯などを山本から説明し、取り組んでほしいと要望した。

制度面では、短期正規雇用制度は実施されており、今まで2名が利用していた。育児休暇では、休暇期間はいろいろであるがほぼ取得されていた。ただ、男性医師の育児休暇の取得はなかった。

意見交換会には、院長の内藤先生や理事長の今田先生をはじめ、医師や看護師が約40名参加し、活発な意見交換がなされた。

産婦人科の女性医師からの発言で、公立保育所は熱が37度になると親に連絡が来て迎えに行かなければならない、夫は無関心で協力してもらえず、やむを得ず知人にお願いしている。男性も女性も共に育児をするようになってほしい。他の地域から転入して働く若い人達は、親戚や知人もいなくて苦労している。女性医師が夜勤をしなくなっており、このままでは夜間の分娩をどうやって支えるか心配である。内科の女性医師は、夜間保育は大変助かっている。しかし、小学生になると学童保育が問題となる。育児休暇は取得したが、その間にも、月に数回内視鏡検査を行う勤務ができたことは良かった。院長からは、ワークライフバランス委員会を作って検討するのはどうかとの発言があった。また、看護師からは、働く女性たちの意見を吸い上げる場がほしいとの意見もあった。

働く女性医師や看護師の問題が自から提起されて、それを解決すべき方向も出され、有意義な会であった。坂総合病院の関係者のご協力に感謝したい。

NO PHOTO

写真1 院長 内藤孝先生

## 第7回 医学生・研修医支援セミナー

毎年開催している医学生・研修医向けのセミナーは、1月29日午後6時30分から長陵会館において開催した。

## 1. 東北大学病院の女性医師支援と宮城県女性医師支援センターの取り組み

はじめに当支援センターの東北大学病院からの委員である、藤原実名美先生（輸血・細胞治療部）が話された。2013年12月に、下瀬川病院長直属の新組織「東北大学病院女性医師支援推進室」が設置され、現在は藤原先生が室長となり活動している。来年度からは、マタニティ白衣の貸出し、ワークライフバランスの講義開始および就学前児童養育のみが対象であった時短対象の拡大が行われる。今後、院内保育園の定員増加や陽当たりのよい園庭の要望、学童保育の設置、キャリアアップに向けた対策など、ハード・ソフト両面から支援していけるように活動する。特に、東北大学医学部では、ジェンダーに関する講義が無く、他大学に後れを取っていたので、ワークライフバランスの講義を学生が聞くことは大きな進展と思われる。

## 2. シンポジウム：あなたが輝いて働くために～私がこの科を選んだ理由～

佐々木悦子委員がコーディネーターとなり、4名の女性医師が担当した。

仙台医療センター眼科 橋本清香先生の「女性医師の働き方（眼科の場合）」では、身近に仕事と家庭を両立して、いきいきと働くロールモデルとなる女性医師がいたことで、選びやすかった。また、白内障や硝子体術後の患者の生活ががらりと変わることや斜視術後の患児の喜ぶ様子に、やりがいを感じると話された。

みやぎ県南中核病院／仙台厚生病院消化器内科 柏葉水穂先生は「消化器内科、消化器外科を目指すあなたへ～卒後15年の消化器内科嘱託医の立場から～」を話された。卒後3年は消化器外科を目指したが、育児との両立を考えて消化器内科に進路を変えた。10年目までは常勤であったが、長男の入院をきっかけに、常勤ではへとへとになってパート勤務を選択した。現在は複数の病院において、非常勤で消化器内科医として内視鏡を行っている。将来のために勉強している。少しの勇気と周りの協力があれば、復帰できると思うと結ばれた。



写真2 セミナー風景

東北薬科大学病院整形外科 峯岸英絵先生のテーマは「私が整形外科を選んだ理由」であった。医師になって15年目だが、卒後2年から6年間出産と育児のために臨床から退いた。現在は3人の育児をしつつ整形外科医としてフルタイムで働いている。特筆すべきは夫の協力である。はじめ脳外科医であった夫は、その後、老健施設勤務の内科医に転向して家事一切を受け持っている。三男出産時には、夫が半年間育児休暇を取得した。整形外科医の女性医師は3%に過ぎず、女性整形外科医の存在は貴重である。今は、完全に臨床から離れるべきではなかったと反省していると述べられた。

東北大学病院小児外科 中村恵美先生は「小児外科医の誇り」として、ハツラツと働いている様子が伝わってきた講演であった。小児外科の対象疾患が多岐にわたること、対象も新生児から中学生までと広いことから、おもしろそうだと思って選んだ。皆さんはご自分のテーマソングをお持ちですか？と質問をされた。彼女のテーマソングは電子戦隊デンジマンであった。「デンジマン デンジマン… 誰かが助けを求めている どこかで誰か叫んでる 小さな命を守るため 愛と勇気の炎を燃やす デンジデンジデンジ オー！デンジマン（一部）」彼女のミッションが含まれていて、楽しかった。

参加者は24名であったが、学生は男子学生も含めて9名であった。いずれもこれから医師を目指す若者に役立つ、優れた講演であった。